

1. ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。御使いは、はいつて来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」(1:26-28)
 - a. 神はある者を選び、その人を通して御約束を成就される。より大きな御約束は神から特別の恵みを受けた人を通して実現されるが、その人たちは必ずしもこの世で名が知られているというわけではない。
 - b. ここではイエスの産みの母が紹介される。まず町の名前、そしてどういう人であったか(処女)、誰と結婚するのか、そして最後にマリヤという名が挙げられる。
 - c. マリヤは名も知られぬ小さな町に住む若い少女で、夫ヨセフにより連れ出された。ヨセフも王の家系(ダビデの子孫)ではあったが大工であったことからそれほど裕福ではなかったはずである。
 - d. 敬虔な男性と結婚の約束があるということは恵みであるが、マリヤは外的な状況からは自分が恵まれているとは思わなかったであろう。ところが天使ガブリエルはマリヤのことを「恵まれた方」と呼ぶ。

2. しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」(1:29-33)
 - a. 何もしなくても生まれつき神の祝福を受けている人もいれば、その生き方により神から祝福を受ける人もいる。
 - b. 天使ガブリエルはマリヤに「あなたは神から恵みを受けたのです」と言う。神は、マリヤが敬虔なおとめだったので、この世の救い主イエス・キリストを身ごもるよう選ばれたのである。
 - c. 救いはイエスを通して得られるものであり、私たちが自分で得られるものではない。しかし神はこの世で目的を実現させるためマリヤのような信頼できる人物を探しておられる。

3. そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に望み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。ご覧なさい。あなたの親類のエリザベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません。」マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。(1:34-38)
 - a. 神の御約束は破られることがない。それを成就するためにふさわしい人物を神は探しておられる。
 - b. マリヤはガブリエルからのメッセージを聞きひどく戸惑った。どうして処女が身ごもることができののだろうか? 肉体的には不可能だが、人間にできないことも神には可能である。神の御言葉はこの世で最も力のあるもので、地球上の何によっても止めることはできない。
 - c. 神に選ばれた人物マリヤは、それにふさわしい才気あふれる応答をする。私たちも神の御約束の成就を見たいなら、神とその御言葉に対してマリヤと同じような態度であるべきである。